

## 安彦一恵先生御退職記念号に寄せて

水谷雅彦

『DIALOGICA』第15号は、本年3月をもって滋賀大学を停年で退職された安彦一恵教授の退職記念号であり、いわゆる“Festschrift”にあたります。安彦先生は、京都大学倫理学研究室の故森口美都男教授門下の総帥として永年にわたって日本の倫理学界をリードしてこられました。ヘーゲル研究からスタートされた安彦先生の研究は、滋賀大学に奉職の後は、ドイツにおける「実践哲学の復権」運動に棹さすものとして発展し、とりわけフンボルト奨学生としてコンスタンツ大学に留学の後は、エアランゲン学派やハーバーマスのコミュニケーション倫理学の日本における代表的研究者としてご活躍になりました。また、安彦先生は、応用倫理学やメタ倫理学の領域においてもめざましい活躍をしておられています。前者においては、とくに景観論を中心とした独自の環境倫理学を展開され、また後者に関しては、'Why be moral?' 問題を始めとする幅広い問題に積極的に取り組んでこられました。これ以外にも、歴史、公共性、自由意志といった困難な問題群に関して、斯界をリードする論考を数多く残しておられます。多くが本誌を始めとして電子的に公開されているこれらの業績は、現代において倫理学を学ぶ者にとってのテーマ、論点や文献の発見のための宝庫であり、その参照は必須のものとなっています。

安彦先生は、関西倫理学会委員長や日本倫理学会常任評議員としてなど、学会においても多くのお仕事をなさいましたが、それら以上に刮目すべきは、つねに若手研究者の仕事に目配りをされ、学会、研究会における厳しい（執拗な？）質問、批判のみならず、ご自身の論攷において若い世代の論文を積極的に俎上に上げるといふ、日本の研究者としては希な研究方針であると思われまふ。しかしこれは、「教育者」としてのものというよりは、たとえ若手であっても同じ土俵で切磋琢磨（私との共通の恩師である森口先生のお好きな単語でした）すべき「同僚」として扱うというものがあったというべきでしょう。安彦先生の創刊になる、日本における哲学系の電子ジャーナルの嚆矢でもある『DIALOGICA』は、まさに誌名が示すとおり、そのための場所としても設定されたものであり、本記念号においても、それに相応しい論考が寄せられています。その意味では、本号は、通常の「退職記念論文集」とは異なり、安彦先生ご自身の倫理学、ひいては次世代を担う研究者にとっての今後の出発点となるべきものであるものと思ひます。したがって、ご退職と本号の刊行にあたって安彦先生にお贈りすべき言葉は「お疲

れ様でした」や「ありがとうございました」ではなく、「さらなるご精進」を祈念するものとならざるをえません。そしてそれは当然我々自身にも向けられているということを銘記して、つたない「前書」とします。

みずたに まさひこ（京都大学文学研究科倫理学研究室）

（ 本号目次ページに戻る = [http://www.edu.shiga-u.ac.jp/dept/e\\_ph/dia/15.html](http://www.edu.shiga-u.ac.jp/dept/e_ph/dia/15.html) ）